

特集テーマⅡの設定について

平 沢 茂

(文教大学教育研究所所長)

Introduction to Feature Articles II

HIRASAWA SHIGERU

(Head of Institute of Educational Research, Bunkyo University)

松本和俊さんが学生課にいた頃であったと思う。「Aさんをご記憶ですか」と問われた。文部科学省にいたところに出会ったことがあり、個人的なおつきあいではないものの、よく知っている人である。聞けば、A氏は、大学の教員として仕事しておられるとのことであった。また、松本さんが、その大学の大学院生として勉学中であることも、その時に聞いた。「修論の内容をいつか聞きたいね」ということでそのときの話は終わった。

それから数年後、図書館の戸田あきらさんが大学院で学んでいると聞いた。また、同じころ、鈴木正紀さんも修士を取得しているとの情報を得た。これらの論文が学内で紹介されないのはいかにももったいない。

そう考えていた矢先、昨年、戸田さんが博士取得の見込みであることを聞くに及んで、これは教育研究所の紀要に掲載しなければ、と思うに至った。同じ頃、放送大学において、教育研究所の井上英子さんが修士論文に取り組んでいることを知った。さらに、松本正光さんも、松本和俊さんと同じ大学院に入ったという話を聞いたことがあることを思い出した。

こうして、私が知る範囲の5人の修士論文の本紀要への収録について、まずは5人の方々の了承を得た後、教育研究所会議に諮り、その合意を得て、この特集が決まった。

戸田あきらさんの論文タイトルは「図書館は役に立っているか：大学図書館のアウトカム評価に関する研究」である。戸田さんは本学図書館に籍を置いていたことがあり、その時の課題意識が学位取得につながっているのに相違ない。図書館の利用率が高いことが質を保証するものではないという課題意識は確かに重要である。近年、あちこちで数値目標が重要だといわれる。しかし、量と質とが一致するという保証はない。先ごろ、某教育委員会の評価に関わった際、その問題があらわになったことがある。大学図書館の評価をどうすべきかの考察は貴重であろう。

鈴木正紀さんの論題は「ドイツの大学図書館における資料選択：近代社会における「主題専門家」の発生」である。これもまた、鈴木さんの職務と関わる課題から生まれた論文である。主題専門家は、Referentenとなっている。和製英語で言うところのレファレンサー、すなわち、参考業務担当者ということであろうか。日本では、図書館の専門職員と言えば司書に限定される。しかし、主題に応じた専門的なスタッフというわけではない。この辺りに、光を当てた研究である。

松本和俊さんの論文は、学生の厚生補導に対する大学の在り方を問い直す論文である。厚

生補導は、小学校・中学校・高等学校における生徒指導に該当する用語である。文部科学省の用語では、生活指導は生徒指導である。同様に、大学生の生活指導は、厚生補導という用語が使われてきた。現代における学生の変化に対応する厚生補導に光を当てた研究で、これまた、松本さんの職務から出発した研究である。

松本正光さんの研究は、大学の附属学校に関する研究である。ことに、大学の附属高等学校と大学との関わりを、主として進学的面から論じている。本学も、附属高等学校の生徒の入学に関してどうあるべきかが議論されている。そのことに一定の情報を提供する研究であると言ってよい。

井上英子さんの研究は、我が国における社会科教科書の歴史記述に関して鋭い切り込みを入れた研究である。最近では、沖縄戦における集団自決問題に関する高校の歴史教科書の検定が問題になったように、社会科の教科書、特に歴史の記述に対する政治的関与は、しばしば論議を呼ぶ。本論文では、特に、中国との戦争に関する教科書の記述がどのように変わったのかを明らかにし、その記述の変容の背後に何があるのかを考察した。この論文は、放送大学大学院の学生論文集『Open Forum』に研究ノートとして掲載される予定であるという。

以上、今回は知りえた範囲の5人の方々の学位論文（博士論文1点、修士論文4点）を取り上げた。おそらく、今回は探り当てられなかった他の方々の学位論文が埋もれている可能性は高いと思われる。今後、さらにそれらを探り当て、再び、このような形でご紹介したいと願っている。そのような情報をお持ちの方は、ぜひ、教育研究所宛にご教示願いたい。本学職員の方々の旺盛な研究意欲は、本学にとって貴重なものである。本学の人的資源の豊かさを、今後とも掘り起こしていきたいと考えている。